

ポスト冷戦期のヨーロッパ社会と軍隊

——ハンガリーの徴兵制廃止を中心に——

荻野 晃

1 はじめに

冷戦終結後に進出したグローバリゼーションの波は、西欧諸国でヨーロッパ連合（EU）の統合へ向けた政治、経済の変容を促した。さらに、グローバリゼーションによって生じた社会変動や価値の多様化、主権国家の相対的な地位の低下は、ヨーロッパ規模で安全保障とも密接にかかわる軍隊と社会との関係にも影響を及ぼしている。グローバリゼーションがもたらした価値観の変化の具体的な事例として、国民国家（nation-state）への不服従、女性の社会進出、さらに同性愛者の社会的認知などが挙げられる。さらに、冷戦後の西欧の軍隊に関して、近代における国民国家の形成と密接に結びついてきた徴兵制の存在意義が議論の対象になった。⁽¹⁾

しかしながら、徴兵制をめぐる議論に関して、一九八九年の体制転換の後にヨーロッパ統合への参加を進めてきた中・東欧諸国も無縁ではなかった。現実には、体制転換後の急激な価値観の変化は、政軍関係とくに市民社会

ポスト冷戦期のヨーロッパ社会と軍隊

一

と軍隊との関係にも変化をもたらした。筆者自身、これまでハンガリーを中心に、体制転換後の中・東欧における軍隊と社会との関係について論じてきた。^②さらに、民主化後の社会における軍隊の役割を考察する際、徴兵制の存続をめぐる議論を無視することができないと筆者は認識している。

本稿の目的は、徴兵制の変容に焦点をあてて冷戦後のヨーロッパにおける軍隊と社会との関係を考察することにある。具体的には、徴兵制の廃止をめぐる議論を通じて、ポスト冷戦期の社会における軍隊の新たな役割を明らかにする。分析に際して、国民国家と徴兵制との関連性に着目する。本稿では、とくに中・東欧の事例としてハンガリーを分析対象とする。さらに、ハンガリーと西欧との比較も試みる。

次章では、主権国家と徴兵制の歴史的な関係を検証する。第三章で冷戦期のハンガリー人民軍の変容について説明する。第四章では、冷戦後のヨーロッパにおける軍隊と徴兵制の変化について述べる。第五章でハンガリーの国防軍改革と徴兵制との関連性を論じる。第六章では、ハンガリーの徴兵制の廃止とその後の問題点について述べる。そして、最後に、徴兵制廃止後のハンガリーの社会と軍隊との関係の展望を考察する。

2 徴兵制のなりたち

近代ヨーロッパにおける主権国家システムの成立は、三十年戦争終結の際に締結された一六四八年のウェストファリア（ヴェストファーレン）条約にさかのぼる。三十年戦争を通じて、ヨーロッパにおけるキリスト教共同体ともいえる中世の秩序が解体した。そして、三十年戦争で主な戦場となったヨーロッパ大陸の中央部では、神聖ローマ帝国の有名無実化の動きが加速した。その結果、帝国の版図内に存在する領邦の君主、諸侯がそれぞれ

の領地を実効統治するための「主権」を有するようになった。そして、主権国家が自国の国益を追求する中で、他の主権国家との間での外交とその延長線上における戦争が繰り返られた。

ヨーロッパで主権国家システムが成立した一七世紀から一八世紀にかけて、君主を頂点とする国家間の戦争は主として傭兵によって行われた。国内の中央集権化に成功した王朝は、その経済力を背景に常備軍を創設した。にもかかわらず、当時のヨーロッパ諸国の動員可能な兵力は、後述する国民国家の形成以降と比較してはるかに小さかった。また、文化的に同質性の強いヨーロッパの王朝間での戦争では、終結の後に勢力均衡 (balance of power) の状態が比較的容易に形成された。

一七八九年のフランス革命勃発からナポレオン (Napoléon Bonaparte) による戦争の終結まで四半世紀にわたるヨーロッパ秩序の変動は、国民国家の形成を促した。ヨーロッパ列強によるフランス革命への干渉戦争を契機に、フランスは領土内に住む人々を「国民」として統合することになった。革命のイデオロギーや理念がナショナリズムの主張と結合することにより、国民国家が正統な存在となった。すなわち、フランスでは同一の「ネイション」に所属するという意識形成が市民革命に伴う政治や社会の変革と同時進行した結果、国民国家としての一体感が国家の主権の内実により具体性を持たせることになった。

ここで、一八世紀にヨーロッパで発達した啓蒙思想が徴兵制に及ぼした影響に着目する。社会契約は旧体制の国家で信じられてきた内容と異なるタイプの国家と市民との結びつきを提唱した。そこでは、「主権」の概念に対して、単なる指導者よりも政治的な共同体との関連性が含まれる。つまり、「主権」が「国民」にある場合、「主権」の擁護はすべての「国民」に課された義務である。このような考え方は、市民の権利と兵役との結びつ

きを理解するうえで重要となる。⁽³⁾

国民国家が形成される過程で、徴兵制はいわば「ネイション・ビルダー」⁽⁴⁾としての役割を担うことになった。旧体制下における身分の上下にかかわりなく、兵役に就いて国土を守る体験を共有することが、「国民」をつくりだすことに寄与したのである。つまり、徴兵制の定着とは、人々が国土を守る義務を果たすことによって、祖国の構成員である「国民」としてのアイデンティティの共有を意味したのである。すなわち、徴兵制はナショナリズムに裏づけられた国家の持つ「主権」と不可分の関係にある「国民」と強く結びついた制度であった。

さらに、国民国家がもたらす一体感に裏づけられた徴兵制は、戦争の性質をも変化させた。プロイセンやオーストリアによる革命への干渉戦争の最中のフランスにおいて、一七九三年に近代的な徴兵制が成立した。徴兵制の導入はこれまでにない大規模な兵力の動員を可能にした。その結果、勃興するナショナリズムを背景に徴兵からなるフランス軍は、自国に侵攻するヨーロッパ列強の軍の撃退に成功した。その後、ナポレオンに率いられたフランス国民の軍隊がヨーロッパ大陸を席卷することになった。従来の王朝間での戦争の際には、主権国家の領土内に住む人間たちにとって、交戦国とそこに住む人間の存在は「敵」として認識されなかった。しかしながら、ナポレオンの軍隊に蹂躪された国々でも、やがてフランスと同様、住民の間に外敵から国土の解放をめざす意識が芽生えることになった。その結果、主権国家間の戦争は、交戦国の「国民」の間での戦争の性格を帯びるようになったのである。

その後、ナポレオン戦争の末期のプロイセンをはじめ、ヨーロッパ大陸の国々でフランスを模範とする徴兵制が導入された。一八六八年には、オーストリア・ハンガリー帝国でも徴兵制が導入された。⁽⁵⁾さらに、徴兵制は一

八七〇年代には近代国家の建設を推し進める日本、第一次世界大戦期にはイギリス、アメリカでも導入された。

さらに、二〇世紀に入ると、科学技術の進歩と相俟って、機関銃、戦車、航空機、潜水艦など殺傷能力の高い新たな兵器の登場とともに、戦争は軍事のみならず、政治、経済、文化など主権国家の有するあらゆる力と資源を結集した長期間にわたる厳しい総力戦へと変貌した。総力戦を戦いぬくために、徴兵制にもとづく大規模な兵力の動員が不可欠であったことはいうまでもない。

3 冷戦期のハンガリー人民軍

本章では、主要な分析対象国であるハンガリーの社会主義体制下における軍隊の変容について述べる。一九四八年にハンガリー勤労者党（共産党）が権力を掌握し、ソ連型社会主義体制への移行が進むと、ハンガリー国防軍（Magyar Honvédség）はソ連の軍事顧問団の指導の下にハンガリー人民軍（Magyar Néphadsereg）として再建された。人民軍兵士の訓練、教育はソ連式にあらためられた。ヨーロッパの東西分断と二つの軍事ブロックの対峙した冷戦時代、ハンガリー人民軍は二年にわたる徴兵制にもとづく大規模な兵力を有していた。しかし、その一方で、ハンガリー人民軍のみならず、ソ連軍に従属した東欧の軍隊は組織の規模こそ大きかったにもかかわらず、実態は前近代的な兵器による能力の高いとはいえない部隊からなっていた。

さらに、人民軍に共産主義イデオロギーを移入することで、党と軍との一体化が進行した。独自の国防ドクトリンを有しない東欧諸国の軍は、国民国家の軍隊としての機能を果たしていなかったとアレクシエフ（Alexander Alexiev）は論じた。さらに、ワルシャワ条約機構を通じてソ連軍の影響下に置かれた東欧の軍の内

部では、自国の国民的な価値や政治的アクターへの忠誠よりも、社会主義の普遍的な価値、ソ連への忠誠が強調されていたとアレクシエフは指摘した。⁽⁶⁾まさに、ハンガリー人民軍はハンガリー国民でなく、不人気な共産主義体制、究極的にはソ連の戦略的な利害への奉仕者となったのである。⁽⁷⁾

にもかかわらず、一九五六年一〇月に民主化を求めた民衆蜂起（ハンガリー事件）が勃発すると、人民軍は蜂起の鎮圧に参加しなかった。また、一部の人民軍の兵士がソ連軍と戦った。ハンガリー事件の後に成立した社会主義労働者党第一書記カーダール（Kádár János）を中心とする政権は多くの将校を追放して、党による軍への統制を強化した。また、カーダール時代、軍事予算の伸びは国民所得のそれを超えない範囲に抑制されていた。一九六〇年代以降に装備の近代化がはかられた。にもかかわらず、実際に導入された兵器はソ連製の旧式に過ぎなかった。

一九六〇年代半ば以降、国内統制の緩和、経済システムの改革に向けた路線転換がはかれると、ハンガリー国内で抑圧装置としての軍の役割が低下した。だが、その一方で、軍の官僚組織化の弊害として、軍内部への党のイデオロギーを浸透させる政治将校の腐敗、幹部候補生採用での党員師弟の優遇、人民軍幹部や将校の教育水準の低下、兵員の士気の低下などが問題となった。さらに、一九六八年の「新経済メカニズム」の実施以降に拡大した国家の統制が及ばないセカンド・エコノミーから排除された存在である職業軍人は、所得水準の低下から社会的地位や名声の高い魅力ある職業とはみなされなかった。

国内における人民軍の威信が低下する一方、軍の社会主義イデオロギーからの脱却が進行していた。一九七五年の徴兵規定で、ハンガリー人民軍の教育において「国際主義」の価値観のみならず、「国家や軍の伝統」も強

調された。さらに、一九八一年から一九八二年のセメスターから、学校や大学での軍事教育においても「社会主義の建設」「ソ連との友好」よりも「国民の価値観」「愛国主義」が重視されるようになった。また、一九八〇年代に入ると、ハンガリー人民軍はワルシャワ条約機構の軍事演習でも非協力的な姿勢を示すようになった。その要因として、人民軍の将軍たちの間で加盟各国の軍の国民性を否定するソ連軍やワルシャワ条約機構に対する反感が強まっていたことが挙げられる⁽⁸⁾。他の東欧の軍隊と比較しても、ハンガリー人民軍は脱イデオロギー化（脱政治化）された軍への移行が進んでいた。その結果、一九八〇年代になると、漸進的ながらも人民軍は党や体制でなく国民国家を擁護するための軍隊へと変化しはじめた。

さらに、共産主義時代の末期になると、東欧諸国では政治体制のみならず政軍関係においても多様性がみられた。バラニー (Zoltan D. Barany) とデアーク (Deák Péter) は共産主義時代末期の東欧の政軍関係に関して、「職業化された (professionalized)」タイプと「政治化された (politicized)」タイプの二つに分類した。前者として、軍人の職業化が政治的教化に取って代わったハンガリー、ポーランドが挙げられた。他方、後者には、軍人の政治化が高度な状態で維持されたブルガリア、チェコスロヴァキア、東ドイツ、ルーマニアが挙げられた⁽⁹⁾。

バラニーとデアークが指摘した「職業化された」タイプの政軍関係のハンガリーとポーランドでは、共産主義体制の政治エリートが漸進的な自由化の試みの中で自発的に権力を放棄した。そして、体制転換の過程で、軍は政治への不介入をつらぬいた。他方、「政治化された」政軍関係にあったチェコスロヴァキア、ブルガリア、ルーマニアでは、政治エリートに自発的な権力放棄の用意がなく、共産主義体制崩壊の局面において軍の動向が重要となった。

一九八九年当時、社会主義労働者党内の改革派主導による民主化に対する人民軍の不介入の要因として、前述のようにカードル時代から軍人が権力の中枢から排除されていたことが挙げられる。さらに、ハンガリーでは経済システムの改革が試みられた結果、他の東欧諸国と比較しても自由な社会が形成されていた。その結果、先述のように、人民軍の将校の間でさえも、自国の国民性や民族性を否定するソ連やワルシャワ条約機構に対する反感が強まっていた。そのため、体制転換当時、人民軍は共產主義体制を擁護しなかった。退役して最初の文民国防相となったカールパーティ (Kárpái Ferenc) にまつ、一九九〇年の初頭までに党と軍との分離が遂行された。そして、一九九〇年三月、人民軍は国防軍の名称に戻された。

4 冷戦後のヨーロッパの軍隊と徴兵制

モスコス (Charles C. Moskos)、ウィリアムズ (John Allen Williams)、セガル (David R. Segal) は、一九世紀以降の軍隊の変遷を「近代 (Modern)」、「後期近代 (Late Modern)」、「ポストモダン (Postmodern)」の三段階に分類して論じた。^⑩

第一の「近代」とは、一九世紀から第二次世界大戦終結までの時期にあたる。「近代」の軍隊は、徴兵制を導入した市民の兵士からなる。起源は一七九三年のフランス革命期の国民皆兵 (*levée en masse*) にさかのぼる。

第二の「後期近代」とは、二〇世紀半ばから一九九〇年代初頭までの時期である。「後期近代」の軍隊では、将校クラスのプロフェッショナルリズムが強調された。同時に、冷戦という時代を背景に、徴兵にもとづく大規模な部隊が組織された。

第三の「ポストモダン」とは、冷戦後の現在である。「ポストモダン」の軍隊の特徴として、志願兵制への移行、侵略戦争の脅威なき時代にあつて多目的の任務、市民社会との相互浸透性が挙げられた。とくに、冷戦後の国際社会において不確実性が増す中で、「ポストモダン」の軍隊では、紛争地域における人道支援、平和維持の任務が重要となる。

さらに、モスコス、ウィリアムズ、セガルは公共の利益を規定する価値観の変化、具体的には一八世紀の理性、一九世紀の国民国家、二〇世紀の科学技術に着目した。そして、二一世紀を迎えた現在、価値の相対化、多元化による国民国家へのアイデンティティや忠誠の弱まりが、軍隊の組織を変化させたと指摘した。また、近年の軍事革命 (Revolution in Military Affairs) とよばれる軍事に関する新しい技術の進歩が、兵員の削減、戦闘員と非戦闘員の差異の縮小など、軍隊の性格を変化させた。⁽¹¹⁾

実際に、ミサイルなどの兵器の発達、大量生産、購入の困難さに加え、現代的な兵器の訓練が予備役に対して不可能になっていた。志願兵制への移行は、一九六二年にイギリス、一九七二年にアメリカで実施されていた。さらに、冷戦の終結後、オランダ、ベルギーでも徴兵制が廃止された。⁽¹²⁾ オランダやベルギーなど西欧では、冷戦が終結する以前、すでに一九七〇年代から軍事に関する技術の変化、社会、文化の変化を通じた徴兵制を支えるイデオロギーの破綻が始まっていたとモルナル (Molnár Ferenc) は指摘する。⁽¹³⁾

また、冷戦の終結に伴うソ連の脅威の消滅を契機に、西欧では軍事予算の削減による福祉等の充実、いわば「平和の配当」を求める声が高まった。軍事予算の削減をはかる際、コストのかかる存在としての徴兵制が問題視されたのである。

国家間の戦争は主権、領土の不可侵を目的とした。国家は目的遂行のため最大限の資源の動員を必要とし、国民に依存していた。近年、九・一一テロとそれに続く「テロとの戦い」に代表される武力衝突を通して、戦争の性質が変化した。戦争や暴力が自由の見地に加え、人権、マイノリティーの権利擁護、その他の規範を出発点として考えられるようになった。換言すれば、戦争が単なる国民国家の問題でなくなった。⁽¹⁴⁾その是非に関して議論の余地はあるが、一九九〇年代に入り、人道的介入として、欧米諸国によって紛争地域での軍事行動が実行されている。冷戦後の紛争地域への軍事介入、平和維持活動の任務に国土の防衛のために訓練された徴兵を派遣することは困難であった。

さらに、西欧における国民国家を重視する価値観からの脱却の現れとして、良心的兵役拒否（conscientious objection）の増加が挙げられる。良心的兵役拒否は宗教上であれ世俗的な動機であれ信念に由来する個人の行動と捉えられてきた。だが、その法的な認識は市民の不服従の産物であることが多い。⁽¹⁵⁾いずれにせよ、国民国家の役割を含めた社会における価値観の多様化、情報通信技術の進歩による軍の任務の高度な専門化、冷戦後の国際社会における戦争の性質の変化によって、ヨーロッパでは徴兵制のレーゾンデートルそのものが問われるようになった。

しかしながら、二一世紀初頭の時点で、まだ西欧諸国の多くは志願兵制への移行に踏み切っていなかった。とくに、冷戦期にNATO加盟にもとづく集団防衛でなく自主防衛の方針を維持したオーストリア、フィンランド、スウェーデン、スイスでは、徴兵制が残った。成人男性による皆兵、徴兵期間の終了後も予備役として兵役の義務を負うスイスが、徴兵制廃止の動きを受け入れない典型的な例である。⁽¹⁶⁾他方、スイスでも一九七〇年代から一

九八〇年代に価値観の変化が生じた。市民兵はかつてのようなスイスのナショナル・アイデンティティに不可欠なシンボルとしての地位を失った。⁽¹⁷⁾

さらに、ドイツの徴兵制についても論じる必要がある。一九五〇年代の再軍備の際、旧西ドイツでは、民主国家としての出発、国際社会への復帰が強調された。徴兵制が軍国主義への回帰、「国家内国家 (Staat im State)」症候群とくに社会から孤立した危険な軍に反対する先駆的な存在であるべきだと徴兵制復活の支持者は認識した。つまり、徴兵制が広く市民と軍隊との接点を持たせる、いわば「制服を着た市民 (Bürger in Uniform)」を体现するような制度としての役割を担った。⁽¹⁸⁾

西ドイツと同様に第二次世界大戦の敗北の後、憲法上の戦力不保持を建前に完全な志願兵制で創設された日本の自衛隊と比較して、徴兵制を復活させた西ドイツにおける再軍備の議論はわかりづらい。だが、西ドイツの徴兵制の復活には、国家の東西分断と国際環境としての冷戦が大きな影響を及ぼしたことは明らかである。民主主義国家として共産主義国家の東ドイツと対峙し、さらに西側陣営 (NATO) の一員として東西対立の最前線に位置した西ドイツでは、戦前の国防軍 (Wehrmacht) と異なり、新たな連邦軍 (Bundeswehr) の徴兵制には、国民が民主国家を守る義務を負担することが期待されたのである。

その後、冷戦終結と国家統一、NATO の「域外 (out of area)」任務に参加した一九九九年のコソヴォ紛争、二〇〇一年の九・一一同時多発テロ、欧州安全保障防衛政策 (ESDP) による安全保障環境の変化にもかかわらず、ドイツの徴兵制は維持されていた。一九六〇年代後半まで、西ドイツでは良心的兵役拒否が規範に対する逸脱とみなされていた。実際、徴兵制が最初に実施された四年後の一九六一年まで、市民の代替役務は採用され

なかった。だが、一九九〇年代後半には三〇―三五%の男子が良心的兵役拒否の資格を模索していた。現実には、代替役務が徴兵制を支えていたともいえる。⁽¹⁹⁾

5 ハンガリー国防軍の近代化と徴兵制

フォスター (Anthony Foster) は冷戦後のヨーロッパにおける軍隊を理念的に「外征 (Expeditionary Warfare)」、「国土防衛 (Territorial Defense)」、「後期近代 (Late Modern)」、「ポスト中立 (Post-Neutral)」の四タイプに分類して、それぞれの役割を比較した。⁽²⁰⁾

まず、「外征」は国外への大規模な戦闘部隊の派遣、展開を想定した軍隊である。ヨーロッパの中では、イギリスとフランスのみが該当する。

次に、「国土防衛」は国土の防衛のための徴兵制にもとづく大規模な部隊からなる軍隊である。また、改革による装備の近代化が課題となっている。さらに、近年、従来の国土防衛の任務に加え、紛争地域での平和維持活動や地域紛争への限定的介入などの国際任務も要求されている。「国土防衛」のタイプには、中・東欧諸国、旧ソ連諸国、フィンランド、ギリシャ、ノルウェー、スウェーデン、トルコなど二五か国が当てはまる。

さらに、「後期近代」は比較的小規模ながらプロフェッショナル化された能力の高い部隊からなる。これらの部隊は自国領土の防衛のみならず、国際任務に従事する。該当するヨーロッパの国は、ベルギー、デンマーク、ドイツ、イタリア、オランダ、ポルトガル、スペインである。

そして、「ポスト中立」は国土の防衛を主任務として、有事において徴兵にもとづく大衆動員を基礎とする。

また、現在では、「ポスト中立」タイプの軍も限定的に平和維持活動などの国際的な活動に参加する。具体的な事例として、スイス、オーストリア、アイルランドが挙げられる。

以下、とくに「国土防衛」の事例としてのハンガリーを取りあげる。そして、国防軍の近代化の視点から冷戦後の徴兵制の変容について論じる。

前章で述べたように、東西陣営が対峙した冷戦期のヨーロッパにおけるハンガリー人民軍は、長期間の徴兵制にもとづく大規模な部隊からなっていた。同時に、部隊の規模と比較して、人民軍の装備、訓練は前近代的な状態であった。

フォスターが指摘したように、「国土防衛」タイプの中・東欧の軍隊には、以下のような三つの冷戦時代の遺産が存在した。⁽²¹⁾

1、軍の熟練度を低下させる財源不足

冷戦末期以降の経済不振による軍事予算の削減のため、中・東欧の軍は能力を維持できなくなった。

2、広範囲の重複性

従来の国土防衛任務のために、中・東欧の軍は大規模な部隊を維持してきた。しかし、冷戦後に加わった国際任務では、規模よりも能力の高い部隊が必要とされた。

3、軍に根強く残る伝統

軍事カリキュラムの刷新にもかかわらず、有能な下士官（Non-commissioned officers: NCOs）の育成にあたって、旧体制下で教育を受けた世代の存在が障害であった。

ハンガリーで体制転換が進行した一九八九年から一九九〇年のセメスターから、軍事大学の教育プログラムが刷新された。「社会主義」「国際主義」に変わり「民主主義」「愛国主義」の価値観が強調され、軍事、安全保障、戦時国際法、軍事史などの科目が重視されるようになった。また、兵員の訓練でもソ連式からNATO式に改められた。さらに、将校の留学先も、ソ連から欧米諸国にかわった。そして、一九九〇年二月までに、五〇人以上の将軍、四〇〇人以上の将校が退役し、国防軍の平均年齢が三五歳にまで下がった。⁽²²⁾

冷戦後の中・東欧における権力の真空状態の中で、ハンガリーは一九九四年に「平和のためのパートナーシップ」に参加するなど、NATO加盟に向けた準備を進めた。しかし、ハンガリー国防軍が集団防衛を基本とするNATOの伝統的な責務に加えて、平和維持活動、国際紛争への介入など、冷戦後のNATOにおけるワシントン条約第五条で規定されていない「域外」任務を履行できるための人材、装備両面での相互運用性 (inter-operability) の確保など、多くの課題が残された。

NATO加盟を果たした翌年の二〇〇〇年六月二日、ハンガリー国会は決議 61/2000 「国防軍の長期的移行の指針」を採択した。⁽²³⁾ この国会決議において、NATOとの相互運用性の確保のための兵器、通信機器の近代化に加え、平時の兵力の削減、兵士の能力の向上、職業軍人中心の部隊への移行が盛り込まれた。

ハンガリー国防軍の改革と今後の役割に関する先行研究では、志願兵制にもとづく能力の高い部隊の重要性が示された。新たな国防軍の青写真として、デアークは危機管理、EUの安全保障・防衛政策の機能、NATO加盟国としての重要な能力、テロ対策、志願兵制、二〇〇二年のNATOプラハ首脳会談の決定にもとづく特別な部隊の創設を挙げた。⁽²⁴⁾ ドボシュ (Dobos Gábor) はNATOの集団防衛に加え、NATO、国連の任務としての

平和維持活動、人道支援、二〇〇二年のNATOによるプラハ能力コミットメントで示された能力の向上の重要性を指摘した。⁽²⁵⁾

二〇〇〇年六月の国会決議で示されたNATO基準に適合した国防軍の近代化には、兵器や通信機器の購入のみならずインフラの整備など莫大な投資を必要とした。そのため、国民経済への負担を考慮して、二〇一〇年までの長期的な移行期間を設けることになった。

さらに、国防軍の近代化のプロセスで、徴兵制の見直しも争点となった。徴兵制に関して、体制転換以降、一貫して兵役期間の短縮化がはかられてきた。兵役義務が適齢期にある若年層の就職の機会を奪っているとの批判があり、徴兵制の廃止を求める声が高まっていた。実際、七〇%以上の人々が、志願兵制への移行に賛成であった。また、一九八九年から二〇〇〇年までの二年間で志願兵が二、〇〇〇人増加していた。⁽²⁶⁾

先述の二〇〇〇年六月の国会決議「国防軍の長期的移行の指針」では、移行期間の終了までに将来の徴兵制の廃止の可能性も含めた兵役期間の短縮化、平時の兵力の削減を進め、志願兵の比率を高めることで、小規模ながらも能力の高い近代的な軍を創設することが目標として示された。一九九八年から二〇〇二年のオルバーン(Orbán Viktor)を首班とする青年民主連合(フィデス)を中心とする保守・中道右派の連立内閣は、国防軍のネイション・ビルダーとしての伝統的な役割を重視した。実際、オルバーン自身はイデオロギー的な動機から徴兵制の廃止に踏み込まなかった。にもかかわらず、二〇〇二年一月一日から、兵役期間が九か月から六ヶ月に短縮された。⁽²⁷⁾

二〇〇〇年六月二一日の国会決議 62/2000 では、平時における兵力に関して、二〇〇一年十二月三一日まで

に、将校を八、六〇〇名、NCOsを一〇、一三〇名、志願兵を六、七〇〇名、徴兵を二一、一六〇名とする目標値が示された。⁽²⁸⁾

ハーベル (Haber Péter) とキッシェ (Kiss Jenő) は小規模な志願兵制への移行を支持しながら、比較的規模の大きな予備兵力の必要性も指摘した。だが、ハンガリーは国土防衛に加えて、平和維持活動や同盟の国際責務に従事できる十分な規模の部隊を創設できないと彼らは指摘した。⁽²⁹⁾ 実際に、国防軍は少数ながら近代的な装備で国際任務のために訓練された部隊と低いレベルの訓練、装備にとどまった多数の部隊からなる二重構造の状態に陥ったのである。

6 ハンガリーの徴兵制の廃止

二〇〇二年に成立したメジェン (Medgyessy Péter) を首班とする左翼・リベラル派の政権は徴兵制の廃止を決定した。そして、二〇〇五年をもってハンガリーの徴兵制は廃止された。一九九四年から一九九八年のホルン (Horn Gyula) 首相の左翼・リベラル連立政権の時期には、退役将校の国防省への復帰により、省内の文民化の動きが後退した。実際、国防省、国防軍の内部には、徴兵制の廃止に慎重な意見が存在していた。二〇〇二年の総選挙の後、連立を組んだ社会党と自由民主連合は、徴兵制の廃止を求める国内世論を尊重した。しかし、その一方で、徴兵制を廃止した国防軍が、労働市場において給与や待遇面で民間企業と競合しながら人材を確保するのは容易でない。

メジェシ政権はオルバーン政権下で作成された「ハンガリー軍の長期的発展の指針」の見直しに着手した。そ

して、二〇〇四年三月二四日に新たな国会決議 14/2004「ハンガリー軍の長期的発展の指針」が採択された。⁽³⁰⁾二〇〇〇年の「ハンガリー軍の長期的移行の指針」と同様、「ハンガリー軍の長期的発展の指針」も国防軍の近代化に費やす二〇〇四年から二〇一三年の一〇年間で三段階に分けて軍の近代化を進めるプランであった。

さらに、徴兵制の廃止を決定したメジエシ政権は、二〇〇五年の志願兵制への移行を前提とした今後の国防軍の方向性を示そうとした。二〇〇四年三月二四日の国家決議 15/2004 において、二〇〇六年二月三十一日まで、将校を七、五〇〇名、NCOs を一一、七〇〇名、部隊兵士（志願兵）を二三、三五〇名とする具体的な目標値が示された。⁽³¹⁾

国会決議 14/2004 では、具体的に、第一段階（二〇〇四―二〇〇六年）で NATO 基準の訓練システムへの移行、必要な技術、通信等の機器、物資の調達、志願兵の労働条件の改善、基地の統廃合を進め、その後、第二段階（二〇〇七―二〇一〇年）、第三段階（二〇一一―二〇一三年）へと進む中で新たな戦闘機、戦闘や輸送のための車輛の配備を進めて装備やインフラを NATO 平均に近づける計画であった。

国防軍の志願兵制への移行後も、能力ベースの部隊づくりへの課題は山積したままである。とくに、クリズバイ（Krizbai Janos）は国防軍改革に際しての人的資本（human töke）の重要性を指摘している。⁽³²⁾

さらに、ハンガリーにおける徴兵制の廃止は、モルナルが指摘するように軍隊と社会との関係における変化の結果でもあった。二〇世紀末には、ハンガリーで「国民」から「ヨーロッパ」「西側」へのアイデンティティの変化がみられた。そして、徴兵制の維持に不可欠な国民国家を防衛する義務に対するイデオロギーの真空状態が生じた。また、良心的兵役拒否に伴う代替役務に関しても、期間の短縮化が実施された。⁽³³⁾ いずれにせよ、一九

七〇年代以降に西欧で始まった徴兵制を支えるイデオロギーの破綻が、冷戦後には中・東欧でも生じていた。西欧と比較すると、国民国家を重視する価値観が根強い中・東欧も、グローバリゼーションに伴う社会変動と無縁ではなかった。

フォスターの分析にもとづく軍隊と社会との収斂において、ハンガリー国防軍は部分的な領域で社会の価値観に近づいた「共有のゲートキーパー (Shared Gatekeeper)」としての軍隊に分類される。⁽³⁴⁾ 一九九〇年代以降、ハンガリー政治制度のみならず多様な価値観や権利を容認する社会への移行段階にある。徴兵制に関して、ハンガリーでは、西欧のNATO加盟国にみられる「弱まったゲートキーパー (Weakened Gatekeeper)」としての軍隊と同様の問題に直面していた。西欧諸国と同様、価値の多様化を背景に廃止を求める社会からの圧力によって、最終的にハンガリーでは徴兵制が廃止された。西欧で議論されるポストモダン社会における価値の多様化と徴兵制への批判は、ハンガリーなど中・東欧でも進行していた。にもかかわらず、ハンガリー国防軍の内部では、一九九九年まで女性がNCOsへの昇進から排除されるなど、西欧と比較して、軍隊と社会との収斂が十分に進展しない領域も存在した。一九九九年にハンガリー国防軍における女性の将校、NCOsの比率は四%であった。⁽³⁵⁾ 国防軍は女性志願兵の登用で女性比率を八〜一〇%に増やす方針を示した。⁽³⁶⁾

ここで、他国の徴兵制の廃止をめぐる動きを概観する。ハンガリーと同様の「国土防衛」のタイプの軍に分類される中・東欧でも相次いで徴兵制が廃止された。また、冷戦期の中立国であるスウェーデンも、二〇一〇年七月に一〇〇年以上にわたり維持してきた徴兵制を廃止した。冷戦終結後の国際環境の変化は、スウェーデンの中立と自主防衛の方針の基礎である徴兵制を非効率なものに変えてしまった。⁽³⁶⁾ スウェーデンでは、一九〇一年に成

立した法律で徴兵制が採用された。その後、一九九四年に改正された法律でも、一九〇四七歳の男子に兵役義務、一六〇七〇歳のあらゆる国民に全体防衛義務が課されていた。⁽³⁷⁾

さらに、「後期近代」に分類されるドイツでも、二〇一〇年の一月に事実上、徴兵制が打ち切られた。先述のように、ドイツは歴史的な経緯を含めて市民社会と国防軍との価値観共有の観点から、徴兵制の廃止に慎重であった。同時に、連邦軍の兵員を一八〇、〇〇〇人まで削減する一方で、国際任務に従事する部隊を七、〇〇〇人から一四、〇〇〇に倍増する方針も打ち出された。⁽³⁸⁾

他方、ハンガリーの隣国で「ポスト中立」に分類されるオーストリアでは、二〇一三年一月の国民投票の結果、徴兵制が維持された。⁽³⁹⁾ オーストリアの徴兵制の存廃をめぐる国民投票は、同年九月の連邦議会選挙の前哨戦の性格を有していた。連立与党内の意見の相違、とくに国民党内部での徴兵制の維持を支持する動きが投票結果に影響を及ぼした。⁽⁴⁰⁾

今後も市民社会と価値観を共有することが、志願兵制に移行したハンガリー国防軍の重要な課題である。冷戦後の国際社会では、国家間での戦争が減少した。NATO加盟を果たしたハンガリーにとって、他国から侵略の脅威にさらされる可能性が極めて低くなった。しかしながら、世界規模でのネットワーク化したテロ組織、民族や部族の対立によって激しさを増す内戦という形で地域紛争は、国家間戦争にかわる国際社会への脅威となっている。さらに、国際テロと地域紛争を切り離して捉えるべきでない。長期にわたる内戦で統治機能を喪失した破綻国家(failed state)がテロリストの温床となり、テロ活動のみならず大量破壊兵器の拡散、組織犯罪、麻薬の流入などの形で、平和で自由な市民社会を脅かす。国民国家の形成に失敗して「近代」が訪れなかった地域から、

ポストモダンの社会へ危険が迫るのである。

テロと破綻国家との関連から、二〇〇一年九月一日の同時多発テロ後のアフガニスタンにおけるハンガリーの国防軍の任務について述べる。二〇〇二年一月八日の国会決議^{111/2002}にもとづき、ハンガリーは国防軍の医療チーム五〇名をアフガニスタンの国際治安支援部隊 (International Security Assistance Force: ISAF) に派遣した。⁽⁴¹⁾その後、他のNATO加盟国による増派に歩調を合わせて、ハンガリーは二五〇名の部隊を送った。二〇〇六年以降、ハンガリー国防軍はバグラーン州で地方復興チーム (Provincial Reconstruction Team: PRT) の任務に従事した。PRTに派遣された二〇〇名の国防軍の部隊のみで、人口七〇〇、〇〇〇で地理的に辺境へのアクセスが困難なバグラーン州全体の治安を守ることはできない。PRTでの国防軍の役割は、同州でのアフガニスタン政府の權威の拡大と治安状況の改善に寄与することにある。また、国防軍は訓練や助言によりアフガニスタンの警察や国軍の発達を支援した。⁽⁴²⁾国防軍のPRTへの参加は、NATO加盟国としての国際任務の遂行にとどまらない。志願兵制に移行了した国防軍が社会でのプレステージを高めるうえで、アフガニスタンでのPRTには重要な意味があったのである。

7 おわりに

冷戦の終結後の国際情勢の変化に伴って、西欧では徴兵制のレーゾンデートルが問われるようになった。さらに、ポストモダンともいえるべき社会における価値の相対化は、徴兵制を支えた国民国家の役割をも変化させた。その結果、多くの国で、徴兵制そのものが廃止された。冷戦後の国際環境と社会の変化は、西欧と比較しても、

いまだ近代における国民国家の価値観を色濃く残す中・東欧でも徴兵制の存在基盤を揺るがしていた。とくに、ハンガリーを含めたヴィシエグラード四か国では、すでに徴兵制が廃止された。だが、志願兵制に移行した軍の今後を考える際、国際貢献が重要な課題である。

二〇一三年三月、アフガニスタンでPRTに従事していたハンガリー国防軍の撤収が完了した。⁽⁴³⁾ ハンガリーのみならず、アメリカを含めたNATO軍によるISAFの二〇一四年末の撤収が既定路線となっている。ハンガリー国防軍にとって、アフガニスタンでのPRTは志願兵制への移行後に従事した大規模な国際任務となった。六年以上にわたるPRTの任務では、国防軍の兵士十六名が犠牲になった。⁽⁴⁴⁾ にもかかわらず、国内では撤収を求める声は少なかった。また、二〇一〇年の政権交代後もPRTは継続された。二〇三年の秋に始まったイラクでの復興支援活動は、駐留期間の延長に関する国会決議の際に当時の野党第一党フィデスの反対により二〇四年末に撤収を余儀なくされた。アメリカを支持する有志連合でなされたイラクの復興支援と異なり、NATOの枠組みで行われたアフガニスタンの復興支援は極右政党ヨビックを除く与野党の合意の下で進められた。

二〇一一年九月一日の同時多発テロへの報復として始まったアフガニスタン戦争とその後の復興支援活動について、戦争そのものの正統性、支援活動の成果で現在も評価が分かれている。しかしながら、徴兵制廃止後のハンガリー国防軍が市民社会と接点を持つうえで、国際任務への参加は不可欠であった。脅威が多様化して、不確実性が増した二〇一一年九月一日以降の国際秩序の安定化への貢献を通して、プロフェッショナルな軍隊と社会との価値観の共有が実現するのである。

最後に、本稿作成中の二〇一三年六月一九日、ハンガリーの体制転換当時の外相であり、一九九〇年代後半に

首相を務めたホルンが八一歳で死去した。ホルンは外相時代に西ドイツへの亡命を求めハンガリーに殺到した東ドイツ市民のオーストリア出国を認めてドイツ統一への流れをつくり、首相時代には中・東欧のNATO加盟への道筋をつけた。ホルンの功績に敬意を払うとともに、心から哀悼の意を表する。

- (1) Pertti Joenniemi, ed., *The Changing Face of European Conscription* (Aldershot: Ashgate, 2006); Anthony Foster, *Armed Forces and Society in Europe* (New York: Palgrave Macmillan, 2006).
- (2) 拙稿「ポスト共産主義時代のハンガリー国防軍と社会——NATOリーダー問題を中心に」『法と政治』第五九卷第三号、二〇〇八年一〇月、六一―九三頁・拙稿「体制転換後の中・東欧の政軍関係——ハンガリーの事例から」『国際安全保障』（国際安全保障学会、第三八巻第一号、二〇一〇年六月、三九―五七頁・拙稿「民主主義国家における軍隊と社会——ハンガリーにおける民軍協力（CIMIC）と平和構築」『研究紀要』（長崎県立大学国際情報学部）第一号、二〇一〇年十二月、一二三―一二七頁。
- (3) Deborah Avant, “From Mercenary to Citizen Armies: Explaining Change in the Practice of War,” *International Organization*, Vol. 54, No. 1, Winter 2000, p. 44.
- (4) Timothy Edmunds, Anthony Foster and Andrew Cotter, ‘Armed Forces and Society: a Framework for Analysis,’ in Anthony Foster, Timothy Edmunds and Andrew Cotter, eds., *Soldiers and Societies in Postcommunist Europe: Legitimacy and Change* (New York: Palgrave Macmillan, 2003), p. 11.
- (5) H  ber Peter-Kiss Jen  , “Professzion  lis, hiv  t  s vagy   nkent  s...?” [  rofesszion  nalna  ,   t  rt  rt  s vagy   nkent  rt  s], *Hadtudom  ny*, 2002, 3, 45.o.
- (6) Alexander Alexiev, ‘Party-Military Relations in Eastern Europe: The Case of Romania,’ in Roman Kolkowicz and Andrzej Korbowski, eds., *Soldiers, Peasants and Bureaucrats* (London: Allen&Unwin, 1982), pp. 199-231.
- (7) Zoltan Barany, *The Soldiers and the Changing State: Building Democratic Armies in Africa, Asia, Europe, and the*

- Americas* (Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2012), p.72.
- (8) Zoltan D. Barany, *Soldiers and Politics in Eastern Europe, 1945-90: The Case of Hungary* (New York: St. Martin's Press, 1993), pp. 109-110.
- (9) Zoltan D. Barany and Peter Deak, 'The Civil-Military Nexus in Postcommunist Hungary,' in Constantine P. Danopoulos and Daniel Zisker, eds., *The Military and Society in the Former Eastern Bloc* (Boulder, Colorado: Westview Press, 1999), p. 34.
- (10) Charles C. Moskos, John Allen Williams and David R. Segal, 'Armed Force after the Cold War,' in Charles C. Moskos, John Allen Williams and David R. Segal, eds., *The Postmodern Military: Armed Forces after the Cold War* (New York and Oxford: Oxford University Press, 2000), pp. 1-13.
- (11) *Ibid.*, p. 5.
- (12) Háber Péter-Kiss Jenő, i. m., 46-48. o.
- (13) Mohár Ferenc, "Tendencia-e a sorozott haderők megszüntetése Európában? [ヨーロッパの連年の連年増減について]," *Új Honvédségi Szemle*, 1999, 2, 24-28. o.
- (14) Pertti Joenniemi, 'Introduction: Unpacking Conscription,' in Pertti Joenniemi, *op. cit.*, pp. 3-4.
- (15) Rafael Ajangiz, 'The European Farewell to Conscription?,' in Lars Mjølset-Stephen van Holde, eds., *The Comparative Study of Conscription in the Armed Forces* (Wagon Lane, Bringley: Emerald, 2002), p. 320.
- (16) Christopher Jehn and Zachary Selden, "The End of Conscription in Europe?," *Contemporary Economic Policy*, Vol. 20, No. 2, April 2002, p. 96.
- (17) Karl. W. Haltiner-Eduard Hirt, 'Switzerland: Between Tradition and Modernity,' in Charles C. Moskos, John Allen Williams and David R. Segal, eds., *op. cit.*, p. 215.
- (18) Kerry Longhurst, 'Resisting Change: The Politics of Conscription in Contemporary Germany,' in Pertti Joenniemi, ed.,

op. cit., pp. 84–87.

- (19) Bernhard Fleckenstein, ‘Germany: Forerunner of a Postnational Military?’, in Charles C. Moskos, John Allen Williams and David R. Segal, eds., *op. cit.*, p. 97.
- (20) Anthony Foster, *op. cit.*, pp. 41–73.
- (21) *Ibid.*, p. 56.
- (22) Zoltan D. Barany, *Soldiers and Politics in Eastern Europe, 1945–90*, pp. 122–123.
- (23) 国会決議 61/2000 号 <http://www.complex.hu/kzldat/o00h0061.htm/o00h0061.htm> を参照。
- (24) Deák Péter, “A haderőreform és a önkéntesség [軍事改革と自願兵制]”, *Új Honvédségi Szemle*, 2005, 1, 29–30. o.
- (25) Dobos Gábor, “A Magyar Honvédség feladatait meghatározó nemzeti és nemzetközi dokumentumok összehasonlító elemzése [ハンガリー国防軍の任務を規定する国内・国際文書の比較分析]”, *Új Honvédségi Szemle*, 2005, 6, 8–10. o.
- (26) Csabai Károly, “A Magyar Honvédség önkéntes haderővé történő átalakításának helyzete 2004. április végén [二〇〇四年四月末におけるハンガリー国防軍の志願兵制への移行の状況]”, *Új Honvédségi Szemle*, 2004, 9, 12. o.
- (27) Lakatos László, “Megváltozó sorkatonai szolgálat, vagy csak szolgálatidő-csökkenés? [変化する徴兵制とその単なる兵役期間の短縮か?],” *Hadtudomány*, 2001, 4, 33. o.
- (28) 国会決議 62/2000 号 <http://www.complex.hu/kzldat/o00h0062.htm/o00h0062.htm> を参照。
- (29) Háber Péter-Kiss Jenő, i. m., 50–51. o.
- (30) 国会決議 14/2004 号 <http://www.complex.hu/kzldat/o04h0014.htm/o04h0014.htm> を参照。
- (31) 国会決議 15/2004 号 <http://www.complex.hu/kzldat/o04h0015.htm/o04h0015.htm> 参照。
- (32) Krizbai János, “A képesség alapú önkéntes haderő kulcsa a szervezeti teljesítmény javítása [能力に基づく志願兵制の軍の鍵は組織のパフォーマンスの修正にある]”, *Hadtudomány*, 2007, 1, 52. o.
- (33) Molnár Ferenc, “A sorkatonai szolgálat Magyarországon a ’90-es évek végén [一九九〇年代末のハンガリーにお

徴兵制」, *Humán Szemle*, 15, 2, 1999, 12-15. o.

(34) Anthony Foster, *op. cit.*, p. 115.

(35) Csabai Károly-Moritz Lajos, "Az önkéntes haderőre való áttérés feltételei [志願兵の軍への移行の諸条件]," *Új Honvédségi Szemle*, 1999, 4, 30. o.

(36) 二〇一〇年七月一日の『ワシントンタイムズ』(電子版) *WT. com*, July 1, 2010. <http://www.washingtontimes.com/news/2010/jul/1/sweden-military-obligations-gone/>; 「消えゆく欧州徴兵制」『朝日新聞』二〇一〇年十一月二二日。

(37) スウェーデンの徴兵制の変遷について, Anna Leander, 'Enduring Conscription: Vagueness and *Vänplikt* in Sweden,' in Pertti Joenniemi, ed., *op. cit.*, pp. 119-136. を参照。

(38) 二〇一〇年十一月十七日の『フィナンシャルタイムズ』(電子版) *FT. com*, November 17, 2010. <http://www.ft.com/intl/cms/s/0/69d7359c-1179-11d1-8609-00144feab49a.html#axzz2WpaF68N>

(39) 二〇一三年一月二〇日の『ニューヨークタイムズ』(電子版) *NYT. com*, January 20, 2013. http://www.nytimes.com/2013/01/21/world/europe/austrians-appear-to-reject-changes-to-conscript-army.html?_r=1&

(40) Helmut Kramer, 'Österreichs Beitrag zur europäischen und globalen Sicherheit. Ein Plädoyer für mehr Selbstbewusstsein im Bekenntnis zu aktiver Neutralitäts- und Friedenspolitik,' in Thomas Roithner, Johann Frank, Eva Huber (Hg.), *Wienel Sicherheit braucht der Friede?: Zivile und militärische Näherungen zur österreichischen Sicherheitsstrategie* (Berlin: LIT Verlag, 2013), S. 89-90.

(41) 国会決議 111/2002 号 <http://www.complex.hu/kzldat/002h0111.htm/002h0111.htm> を参照。

(42) Péter Marton-Péter Wagner, *The Netherlands and Hungary's Contribution to Operations in Afghanistan: Contributions to State-Building or to Crisis Management?* (Budapest: Hungarian Institute of International Affairs Papers, 2008), p. 16.

(43) 二〇一三年三月二八日のハンガリーの全国紙『ネーブサバンニャーグ』(電子版) *2013. március 28. http://nol.hu/belfold/hazaert_afganisztanbol_a_magyar_prt*

(44) 二〇〇八年六月から七月にかけて、P R T に派遣されたハンガリー国防軍の兵士二名が爆発物の処理中に死亡した。二〇〇八年六月一日の『ネープサバッチャーグ』(電子版)、*Népszabadság Online*, 2008. június 11. <http://nol.hu/archivum/archiv-495143>; 二〇〇八年七月十三日の『ネープサバッチャーグ』(電子版)、*Népszabadság Online*, 2008. július 13. <http://nol.hu/archivum/archiv-498745> その後、二〇一〇年八月には移動中の部隊がタリバーンに攻撃され、女性兵士一名が死亡し、三名が重傷を負った。重傷者のうちの一名は、翌月に病院で死亡した。二〇一〇年八月三日の『ネープサバッチャーグ』(電子版)、*Népszabadság Online*, 2010. augusztus 23. http://nol.hu/kulfold/katonahalal_alganisztanban_csapdaba_hajtott_a_magyar_konvoj; 二〇一〇年九月七日の『ネープサバッチャーグ』(電子版)、*Népszabadság Online*, 2010. szeptember 7. http://nol.hu/belfold/meghalt_az_alganisztanban_megseerult_magyar_katona_xo らに、二〇一一年五月にP R T に従事していた国防軍兵士二名が任務中の車両の事故で死亡し、四名が負傷した。二〇一一年五月一七日の『ネープサバッチャーグ』(電子版)、*Népszabadság Online*, 2011. május 17. http://nol.hu/kulfold/meghalt_ket_magyar_katona_alganisztanban

European Society and Conscription after the Cold War: In Case of Hungary

Akira OGINO

The aim of this paper is to examine relations between society and armed forces after the Cold War. In this study, the author focuses on changing face of European conscription.

Conscription played an important role in nation building, when nation-states rose in the 19th Century. In Europe defending national territory depended on armed forces based on wholesale conscription during the Cold War. But recently many people regard conscription as ineffective and out of date. Most of European countries have abolished their conscription since 1990s.

Especially the author tries to analyze the Hungarian Defense Forces, as a case study. Hungary abolished the conscription in 2004 in the process of military reform. At the same time, the author makes a comparative study of Hungarian and West European armed forces after the Cold War.

This paper consists of following sections:

1. Introduction
2. The Origin of Conscription
3. Hungarian People's Army during the Cold War
4. European Armed Forces and Society after the Cold War
5. Hungarian Military Reform and Conscription
6. Hungary Abolished Conscription
7. Conclusion